地域研究　現場の悩み三〇問——何を考え、どう伝えるか

本稿は、地域研究コンソーシアム（JCAS）の地域研究方法論研究会が国内の大学を訪問して行った研究会で行われた質疑応答の一部を再構成したものである。ここにあげた質疑応答が地域研究の方法に関するすべての領域をカバーしているわけではないが、大学教育の場で行われている地域研究の課題の一端を示すものであり、同時にその課題を克服するための手がかりとなることを期待している。[*1]

Ⅰ　地域研究とは

【01】なぜ「地域研究」と呼ぶのか

——なぜ地域研究と呼ぶのか。地域研究と呼ぶと境界性が強調されるような印象を受ける。事例研究でもいいのではないかと思うが、地域研究と呼ぶ積極的な理由はあるのか。

山本　何が何でも地域研究という名前でなければならないとは思わないので、他に適切な名前があればそれに替えてもいいと思う。ただし、今は地域研究という名前で呼ばれているので、地域研究と呼ぶことにどんな意義があり得るかを考えてみたい。

「地域」とは「世界」という全体の一部。したがって、地域というときには常に全体である世界が対置されてイメージされる。これに関して「人類学」という名前について考えてみたい。「人類学は村のことしか研究しない」という言い方があるが、この主張は妥当ではない。直接の研究対象がひとつの村だったとしても、人類学はその村のことしか考えていないのではなく、村のことを考えることを

通じて人類社会全体のことを考えようとしている。「村→人類」という図式を考えたとき、矢印の先に来るもの（人類）で名乗っているのが人類学。これを「村〈からの〉人類〈を考える〉学問」というならば、〈からの〉の後に来るもので名乗っているということになる。

地域研究もこれと同じで、特定の地域のことしか考えていないのではなく、特定の地域のことを考えることを通じて世界全体のことを考えている。つまり、「地域→世界」という図式になるし、「地域〈からの〉世界〈を考える〉研究」ということもできる。人類学は矢印の先に来るもので名乗っているのに対して、地域研究では矢印の元に来るもので名乗っているという違いはあるけれど、個別の事例を見ることを通じて全体を理解しようとする点は共通している。「地域研究」という名前はこのことを常に思い起こさせるので、私はそれほど悪い名前でもないと思っている。

柳澤　地域研究は、まさに境界を強調するために地域を冠している。事例研究では、その事例の該当する範囲がどこまでかがわからない。地域の境界を意識することで、事例研究で得られた理解の適用可能な範囲が限定され、それにより事例研究の成果がどの程度妥当なのかを考えることができる。事例研究は通常なんらかのテーマをもって行われるが、対象とする地域でそのテーマがどのような意味を持っているのかは地域によって異なる。たとえば現金収入の少ないA村とB村があった場合、ほとんどの場合、現金収入が少ない理由はA村とB村では違っている。このように、地域ごとの背景の違いがより大きな社会システムやグローバルな影響に対する地域側の対応の違いを引き起こしていると考えるのが地域からのアプローチ。

【02】「地域研究の成果は作品」なのか

――この研究会の議論は「地域研究の成果は作品である」という方向に向かっているのか。

山本　どこかで誰かによって作られた手法を別の地域にそのままあてはめて出てきた結果を記述しても、それ自体は地域研究の成果として認めにくい。この点を強調すると、地域研究の成果は作品であるという「作品論」として理解されてしまうかもしれないと思う。しかし、地域研究を伝統芸能や芸術作品と同じものと見る方向に向かうつもりはない。地域研究の成果は作品だといってしまえば、大学や大学院で体系的に教え、学ぶことができないことになる。それを地域研究と呼ぶかどうかは別として、何らかの形で地域研究を行っている人は現実にたくさんいるのだから、それぞれが用いている手法を抽出して記述することは可能だろうと思う。この研究会で目指しているのは、すでにある地域研究の方法を抽出して、それを共有し、伝えるため

に言葉で記述すること。ただし、この手順に従えば自動的に論文が完成するという意味での方法ではなく、心がまえの側面が大きくなるかもしれない。

柳澤　これまでの地域研究では「地域研究の成果は作品である」と考えてきたと理解している。しかしこの研究会では、現状では作品としてしか提示されない地域研究の成果を、手法として記述できる部分を明らかにすることと、従来の学問分野ではできなかった研究上の特色を示すことによって、地域研究の可能性を議論したい。

――すでに行われている地域研究の方法を集めて記述するということは、この研究会の議論は「地域研究は何でもあり」という方向に向かうということか。

山本　ひとつの正しい地域研究のあり方を確定することが目的ではないという点では、「地域研究は何でもあり」という言い方と共通する部分がある。ただし、それぞれの地域研究者がばらばらな方向を向いた「何でもあり」なのではなく、たとえ明示的に言語化されていないにしても、多くの地域研究者が共有する課題群のようなものがあり、それに取り組んでいるという意味では何らかのまとまりがあると考えている。そのような問題群を取り出し、どのような答えが試みられてきたかを狭義の地域研究者以外の読者にもわかりやすい形で示す方法を考えたい。

【03】「地域研究は後進国研究」「すべてが特殊」と考えてよいか

――「地域研究は後進国研究であり、先進国を対象とする地域研究はほとんどない。それは地域研究が先進国による後進国研究から出発しているためで、地域研究は帝国主義の産物である」。この主張は妥当か。

山本　地域研究と呼ばれるものの起源のひとつに米国の敵国研究があったことは確か。しかし、だからといって現在の地域研究がそれと同じであるとか、今後の地域研究がそれと同じものであり続けるとかいうことにはならない。地域研究のこれまでの経緯を踏まえ、同じ道をたどってしまう可能性が皆無ではないと自覚した上で、これからの地域研究にどのような意味を込めるかを考えたい。それを考えることなく地域研究を安易に受け入れる態度は、過去だけをもとに地域研究の現実や将来の可能性を一方的に断罪する態度と同じようなもので、どちらも適切ではないと思う。

――かつては「先進国は普遍で、それを基準にアジアを斬る」という考え方があったが、それは間違っている。いまは「すべてが特殊」という考え方があり、だからアジアから出た理論で欧米を斬ることもありうる。地域研究はこのような理解でよいか。

山本　欧米の基準を機械的にあてはめて非欧米を評価する

ことが間違った態度だということには同意見。ただし、「すべてが特殊」だと認めてしまうのはどうか。同じ地球に住む人類なのだから、時代や環境などによって多少の違いは現れるかもしれないけれど、おおもとの部分は同じはず。だから、「欧米社会をもとに作られた理論はもう通用しない、アジアで作った理論で欧米からの理論に対抗するべき」という違いを強調する主張には同意しかねる。

欧米で練られた理論があるのならば、それは少なくともある時代の人類社会のある部分には適合した理論だったのだから、それは受け入れるべき。ただし、その理論は時代や地域が限定された状態でしか普遍性が試されていないのだから、現代の事例や非欧米の事例をもとに「より普遍的」な理論に修正する必要がある。このように、さまざまな地域の研究者の協働によって人類社会全体に通用するような「普遍性がより高い」理論が練り上げられていく。その過程の重要な部分を担っているのが地域研究。アジアの理論でヨーロッパに対抗するという発想ではない。

Ⅱ フィールドに入る／文献を読む

【04】フィールド調査しないと地域研究にならないのか

――私は主に文献調査による歴史研究を行っている。調査対象地に行くこともあるが、現地の研究者に会ったり現地で売られている本を買ったりする程度で、長期間滞在してフィールドでデータを取る調査は行っていない。私は地域研究者に含まれないのか。

山本　地域研究ではフィールドとの関わりが重要な部分を占めるけれど、「フィールド」とは「現場」のような意味で、必ずしも現実世界のある土地のことを指すわけではない。文献調査であっても、ある地域のことを理解し、それを通じて世界全体のことを理解しようとするのであれば、それは地域研究にほかならない。極端にいえば、たとえ短期間の観光旅行でも、現地での人間関係などを意識的に観察すれば対象地域社会への理解に役立つはず。観光旅行だけで相手社会の事情が十分にわかるというつもりはないが、現地に長く滞在すればそれだけで地域研究者になれるというのは大きな誤解だと思う。

【05】仮説が先か、データが先か

――私はフィールドワークをして、いくつかの村に入って教育や進学状況の調査をしている。その成果をまとめて発表しようとしたとき、本来ならば仮説があってそれを証明するはずなのに、先にデータがあってそこから何かを導き出そうとするのは学問ではないと批判を受けたことがある。これについてどう考えればよいか。

田原　欲しいデータが決まっていてそれをとってくるだけでは意味がないと思う。何もなくてフィールドに行くのも問題だが、ぼんやりしたものを持って現場に行く程度でいい。七割くらいは現場ではじめて発見できる。発見するところが重要。教育の調査をしているというけれど、現場で教育だけを切り取って見ているのでは意味がない。教育と経済、教育と自然環境というようにいろいろなファクターが絡み合う状況をとりだすことができれば論文として成り立つのではないかと思う。さらにほかのコミュニティについても見てみて、コミュニティによって変数どうしの絡み合いかたの違いが見えてくると、研究ノートではなく論文になってくる。

柳澤　先行研究をどの程度読み込んでから現場に出向くのかについて。これは若い研究者からよく出てくる質問。未熟な研究者という意味ではなく、研究を始めた最初のうちはみなそういうことを考える。でも、研究を続けていくと、過去の課題の経験の上に次の課題が生まれてくる。データを見る前に先行研究をどれくらい読んだほうがよいのか、あるいは、先行研究を読まないで現地に行ったほうが先入観がないため現場を見たときにいろいろとわかるのか、そういうことで悩むのは研究を始めた初期の段階が多い。何年か経つとそういうことを思わなくなる。

【06】就職するまではディシプリン型、就職してから本格的地域研究？

――現場を深く理解するには、①詳細なデータを集めて積み重ねるという地道な作業と、②集めたデータのうちどれが重要かを選びとり、全体を捉えるひらめきや感性、の二つが重要。詳細なデータを集める部分はディシプリンで達成できる。問題はひらめきや感性の部分。十分経験のある研究者が試みるのはいいけれど、学生のうちにそれをやるには覚悟がいる。指導教官は評価しても、どのジャーナルにも載らないかもしれないし、所属組織の外では誰にも認められないかもしれない。これはある意味で悲劇。学生には「ディシプリン型地域研究」で論文を書いて業績をあげてもらい、職を得てから「本格的地域研究」を自由にやってもらうという考え方も必要ではないか。経験を積んだ研究者になれば「ディシプリン型地域研究」の成果をまとめて「本格的地域研究」を打ち出す余裕が出てくる。

柳澤　「本格的地域研究」を学生に勧めるには覚悟がいる、うまくいかなければ悲劇になるという意見には疑問がある。今日、地域研究はかなり広がりを持ってきている。従来のディシプリン型の研究では地域のことがうまく理解や説明ができないという認識が高まって、地域研究として関わろうという人が増えている。その際のポイントは地域を全体として捉えるセンスで、プロの研究者になってから

ゆっくり習得しようとしても身につかない。プロの研究者になってから「本格的地域研究」に取り組めばよいというのは、対象の全体性を掴むトレーニングができないという点でよくない。細かいデータはたくさん集めて持っているし生々しい話をおもしろく話してくれるけれど全体を捉える枠組がないという研究者ばかり作ることになる。

Ⅲ 論文を書く

【07】地域研究で書くか、それ以外の分野で書くか

――自分は歴史学という既存のディシプリンによって立つけれど、地域研究にもよさそうなものがあると思っている。それが何かはよくわからない。地域研究側に行ったら歴史学からはじきだされてしまう気がする。歴史学だけやっていると自分の研究はうまく表現できない。でも、地域研究のいいと思った部分にどう歩み寄ってよいかがわからない。

田原　地域研究では、実際に現場に行ってどうなっているかを見ることができる。でもそれは歴史研究でも同じで、歴史研究でも対象とする地域があって、現在のその地域に行って様子を見てみれば、自分が研究している時代の自分が研究しているテーマにつながっているはず。現場に行っていろいろもがいているうちに結局何が問題なのかが見えてくる。現場で見つけた問題からスタートして、その問題を解くために何が必要かを悩む方がいい。やろうとしている問題が歴史学で解けるのならばわざわざ歴史学以外のものをやらなくてもよいし、それが歴史学では解けないのであればほかのものをもってくればよい。

【08】データを論文にどうまとめるか

――論文を書いている学生の立場としては、ディシプリンをどう手に入れるかが最大の課題。どの地域研究者の方法を聞いても自分の研究方法と違っていて、どれかを選んで自分の研究に生かすとなると難しい。すぐに身に着いて論文が書けるディシプリンを出してもらいたい。

山本　この研究会で私が話した先行研究を読んでどのような学説史を築くかという作業はまさにそれで、実際に論文を書くときに使うもの。フィールド調査でも、フィールドでどう考え、どう問題に取り組むかという点では先行研究を読むことと共通するものがあると思う。文献資料やフィールドデータをもとに自分の議論を積み重ねていったときに、ある解釈も可能だし別の解釈も可能だとなったとき、どちらの解釈が妥当かを判断するには資料やデータだけ見ていてもだめで、その議論の先にどんな意義があるかを見て決めるしかない。その態度こそが地域研究的な態度

だと私は考えている。事実を正確にひとつひとつ積み上げていけばやがて全体像が見えてくるというのではなく、意識的に探さないと全体像は見えてこない。だからそれをどうやって探すかが重要。先行研究を読んで学説史を築くのはそのため。

【09】地域研究では反証可能性をどう考えるのか

――地域研究ではデータが一度かぎりしか取れない場合もあるというが、地域研究では反証可能性についてはどう考えるのか。

山本　個別のデータをとるときに反証可能性を考えるのは他の学問と基本的に変わりない。問題は得られたデータをどう解釈するかの部分。地域研究では、同じデータでも見る人によって解釈が異なりうることを積極的に認めている。では、同じデータから二つの異なる解釈が出てきたときに、どちらが優れた解釈だと判断するのか。あるいは、どちらか一方が優れた解釈だとは認めない態度をとるのか。これについては、研究者業界が共有している課題群に対してどのような解決を与え得るか（別の言い方をすれば、どちらの考え方の方が世の中をよりよくするか）という観点から優劣を判断するというのが私の考える地域研究の特徴。だからこそ地域研究者たちがそれぞれの研究を通じて言外に語ってきた「物語」が重要で、既存の研究からそれを読み取る力が必要ということになる。もっとも、これは地域研究以外の学問分野でも実はあまり違わないはずだと思う。

――研究会では各研究に「ぼかしどころ」があるという言い方をしていたが、地域研究ではそれぞれの論文で論証が厳密になされていないということか。

山本　そうではない。資料を批判的に読む点では厳密な検証が行われていて、論文ごとの課題とそれに対する答えがぼかされているわけではない。報告のなかで「ぼかしどころ」といったのは、個別の論文が掲げる問いに対する議論と答えではなく、それぞれの研究が持つ意義（研究者がなぜその課題を取り上げたのか）をどのように見つけるかに関する部分。手法が先にあって事例研究をするのではなく、解決したい課題があって、しかし世界全体でそれを解決することはできないため、限定された事例に絞って、適切な手法を見つけてきて事例研究する。その「大きな課題」は論文で明示されないことが多いので、どのように読み解くかが重要になる。だから先行研究をどう読むかをお話しした。なお、これは地域研究では必ず必要となる作業だが、地域研究以外の学問的ディシプリンでも、どうしてその手法を用いるのか、それによって何を解明しようとしているのかなどを意識しなければならない点はあまり違わないと思っている。

【10】他人の手法を真似してはいけないのか

――地域研究では他の人が編み出した手法を別の地域にそのまま適用して事例研究することが積極的に評価されないような印象を受けるが、地域研究の手法はすべて自分で編み出さなければならないのか。

山本　他の研究者が編み出した手法でも、そして他の地域の分析のために使われた手法でも、その手法を用いることの妥当性を検討した上で用いるのならば問題ないはず。もし他人の手法を使うことに対して批判的な反応があったのだとしたら、それは他人の手法をそのまま用いたことへの批判ではなく、異なる地域で通用した手法の有効性を十分に検討せずにそのまま別の地域に適用しようとした態度が批判されたのではないか。目の前に手法があるからそれを適用してみるというのではなく、解決したい課題があってそのために適切な手法を探してくるということであれば問題ないし、むしろどの地域研究者も行っていること。その際に他の人が別の地域で編み出した手法を使うことも当然ある。

Ⅳ いろいろな地域研究

【11】他地域の研究成果を利用する意義は何か

――同じ地域を研究している人とは話が通じやすいが、他地域の研究者とは研究に関する深い話ができないという思いがある。特定の地域の研究者だけでなく互いに対象地域が異なる研究者が集まった場合、どうやって互いに研究を生かしあっているのか。また、自分の研究対象と違う地域の研究成果を読んだり勉強したりすることにはどんな意義があるのか。

柳澤　日本には地域研究のコミュニティや学会がたくさんある。地域研究の学会は小さなものが多い。特定の学会だけで研究しているとその学会だけで意味がある発言ばかりするような思考の癖がついてしまうので、そうならないように地域をまたいだ研究会にも積極的に参加した方がよい。通地域的なつながりを持つと、特定の地域では当たり前だと思われていたことが別の地域では違うということがわかる。たとえば、東南アジアの大陸部で都市の発展を考えると、農業的基盤に投資して発展する農村があって、その延長上に都市があり、農村と都市がつながってともに発展する。都市と農村の両方を見ないとわからないし、コミュニティは連続している。ところが、東南アジアの大陸部以外には、都市の発展がそういうかたちで存在しない社会もある。雨が少なく牧畜で暮らし、広範囲で家畜を使ってぐるっと移動するような牧畜社会もその一例かもしれない。ある特定の土地をベースにした都市・農村関係が存在しない点が東南アジアとは違う。通地域の研究会に出ると

そういうことがよくわかる。

田原　地域研究の醍醐味は、ある地域に身を置いて考えたときに、そこで一番問題になりそうな問題を発見して、地域の文脈からアプローチしていけること。でも、ある地域において発見された「問題」は他地域でも同様に発生していて、しかしその発生の仕方には違いがあるはずで、同じ問題を異なる地域間で比較するというのが大変刺激になるし、それぞれの地域の問題の立て方をさらに鍛えていくことにつながる。現地語資料を深く読んだりするトレーニングも必要だが、それは院生どうしの勉強会でも独学でもできる。

柳澤　地域を超えた比較に関して一言。世のなかに通地域研究や地域間比較研究はたくさんあるが、各地域の各要素を横に並べてそのまま比較するのでは理解が全然深まらない。地域研究でわかっているのは、同じ名前のものでも地域ごとにひとつひとつの要素がもっている意味が全然違うということ。だから要素の全体像どうしを比較しないとだめ。

【12】ヨーロッパの地域研究は成り立つのか

——ヨーロッパ社会は既存のディシプリンで十分に分析できると思うが、ヨーロッパの地域研究というのは成り立つのか。また、ヨーロッパの研究なら日本人より現地人の方が優れていると思うが、日本人の研究者がヨーロッパ研究をする意義は何か。

小森　ヨーロッパの国や地域を特定のディシプリンのなかで研究対象とする場合、「地域の暗黙知」を明らかにすることはそもそもあまり想定されておらず、また、ヨーロッパ的な視線を相対化するという観点もこれまであまり意識されてこなかった。他方、ヨーロッパで地域研究といえば、どれだけその国（地域）の情報と人脈に通じているかによって評価されるところがある。そのため、政治学者から「地域研究者に違和感が持たれないような研究でなければ」などといわれることがある。しかし、現地事情を知っているだけでは研究にはならず、また、既存のディシプリン以外の場では研究を世に問う場がきわめて少ない。ヨーロッパを他者として日本人が研究する意味は小さくないと思うが、当の「地域研究者」が隙間産業あるいはディシプリンでは二流という自己認識を有しているかもしれず、そこがヨーロッパ研究の問題。

【13】自然科学と地域研究は両立するのか

——自然科学者が地域研究の分野で学界に貢献するにはどのような機会と可能性があるのか。私は高分子物理を専門にしているが、文系の地域研究の専攻に所属している。京都大学のように地域研究のなかで理系研究者が多数を占め

ていればまわりに同分野の研究者が多いだろうが、文系が多数派を占める研究組織では理系研究者は個人として研究発表するしかない。

柳澤　モノを開発したり世界のなかで新しいものを見つけたりすることのように世界の最先端を目指すのであれば個人では難しいかもしれないが、それを現実の地域社会から探してくるなら高分子物理の専門性を地域研究に生かすことになるのではないか。機能性食品が地域社会ごとにどのような役割があるか研究することも地域研究として意味があるかもしれない。

――理系では最先端の研究をしないと第一線の研究者として認められないという現実があるが、これに対して地域研究が理系に求めるのは最先端でないことが多い。これから研究者になる学生には文理の両方を備えるようにと教育できるかもしれないが、すでに研究者になっている自分のような存在はどうすればよいのか。学際的な環境のなかで理系が積極的に関われるような状況を作るにはどのような方法があるのか。最先端だけが科学でないという考え方も必要だということは承知しているが、自然科学者である共同研究者にはそのことが理解してもらえず、自分が地域研究に積極的に目を向けようと思うと自然科学者と共通の話ができなくなるという悩みを抱えている。自然科学分野では地域研究的な学問の意義が理解されていないため、関心の対象外に置かれてしまうのだと思う。地域研究が学会ごとやディシプリンごとに分断されてしまうとそれぞれの場で適切に評価されることが難しい。ディシプリンで区切られた学会にも地域研究のセッションができてもいいのではないか。地域研究にもっと積極的に理系の研究者を取り込める方策はないのか。

柳澤　生態学でも、生態システムだけを研究する人もいるけれど、半分ぐらいの研究者は人間社会を含めた生態を見ようとしている。生物多様性にしても、そのメカニズムを研究する人は世界の最先端を目指しているけれど、多様性そのものにも人間が関わっているから人間が関わることで生まれる多様性を生物多様性に含めるという学会や分野もある。

――理系では共同研究が中心だが、これまで私が理系で行ってきた共同研究の人脈や手法が文系主体の地域研究ではうまく使えずに困っている。たとえば、地域研究の共同研究では理系研究者でもまず現地語がわからなければいけないという話になる。

柳澤　確かに文系と理系では言葉に対する感覚が違う。文系は言葉が巧みだが長い。それに対して理系は言葉が簡潔だがセンシティブさに欠ける。たとえば、ある国際会議で外来種の侵入のことを理系の研究者が「invasion」といった。日本の生態学では一九五〇年代や六〇年代には外来種

を「enrichment」と捉えていたが、外来種の受け入れに批判的になって「invasion」と捉えるようになっており、理系研究者としてはその言葉遣いに違和感はなかった。ところがこれを聞いた文系の研究者が、それは移民を侵入者と呼ぶようなものだと怒り出した。人間の話ではないといってもなかなか理解されず、話がかみ合わずに困ったことがある。この例のように、社会的にセンシティブな言葉があることを理解しないと話が通じないため、理系も言葉の使い方を気にすることは必要だろう。他方で、文系の人たちについては、各地域の社会的経済的な理解が往々にして社会学や経済学の分野ごとの言葉に依存している部分が多いような印象を受けている。自分が使っている言葉が他の地域や他の学問分野で使われている言葉とどの程度同じかを考えながら話してほしいし、さらには理系の人がどう受け止めるかも考えながらわかりやすく話してほしいと思うことがある。

V 研究対象との関わり

【14】「よりよい社会」とは誰が決めるのか

――この研究会での地域研究と社会の関係についての議論に「よりよい社会の構築」とあったが、何をもって「よりよい」というのか。地元にもいろいろな意見があり、そのなかで「よりよい」あり方を導き出す上で地域研究者が果たす役割があるのか。

西　誰が「よりよい社会」を決めるのかという質問に二言で答えるとしたら、「みんなにとって」そして「自分の良心にかけて」としか言いようがなく、そういう態度を取るのが地域研究ということになる。それは地域研究には二つの背景があるため。

一つめは、地域研究とは、今すぐに対応しなければならない差し迫った状態があって、それに研究の立場からまともな答えを出そうという要請のなかで出てきた学問分野であること。現実の要請のなかでは常に暫定的な結論を出すことが求められていて、手持ちのデータからは完全に納得のいく結論は得られなくても、それでも結論を出さないより出した方がいいので限定的でありながら結論を出す。もし、誰にとって「よりよい」かわからないので結論を出さないという態度を取るとしたら、それはここでいう地域研究的な関わり方をはじめから放棄しているのであって、地域研究の成り立ちから考えると選択としてありえない。限られた時間のなかで限られたデータのなかから何かをいうときに精いっぱい誠実であろうとするにはどうすればよいのかを考えるなかで地域研究の方法論が発展してきた。もしかしたら同じデータをもとに別の研究者は別の判断をす

るかもしれないけれど、自分はこれだけのデータをもとにこの時点でこう判断する、とそのつど表明してきたのが地域研究者が行ってきたこと。そのような研究成果の発表のしかたが嫌だといって閉じこもってしまうのはやめたいという思いがある。これは私の個人的な信念あるいは研究観といえるようなもの。

二つめは、私が専門としている東南アジア研究という背景のためかもしれない。東南アジアの歴史研究では、東南アジアは中国やインドなどの大文明圏のはざまにあって、次々と押し寄せる外来の文明を利用してきただけで、地域的な主体性はないなどといわれてきた。現在の国民国家も植民地統治の枠組をそのまま受け継いだだけだといわれたりする。このような歴史像がまずあって、それに対抗してどのような歴史像を描くかということで発展してきたのが日本の東南アジア研究、とくに歴史研究。日本の東南アジア研究は、外来の文明を受容しただけで自分たちのオリジナリティがないとか、ほかの地域と比較して民主化が遅れているとかいうように、外部にあるものを基準にして地域の状況を評価するのではなく、在地の秩序に積極的な意義を見出そうとしてきた。植民地統治期の東南アジア社会では、外来の植民地支配者たちが力を持って好き勝手にふるまえていたかというとそうではない。科学技術で勝る外来者が現地の人たちよりも強くて支配しているということでは決してなく、外来者と現地の人たちの調整や交渉のなかで社会のあり方が定まっていく。そうして生まれてきたのが今ある国家や社会の姿。それと同じように、外からいろいろな人がやってきたり介入したりしても現地の人はそのまま言いなりにはならないし、かといって外来のものを全部拒絶して捨ててしまうのでもなくて、それを現地に見合った形で改変して受け入れている。そういうものを蓄積してきたのが東南アジア社会だという認識が私にある。災害対応の現場を見ても、そこにはすでにいろいろな人が入り混じっている。被災した社会の出身者もいれば、同じ国の人だけれど被災していない近隣地域から来ている人もいれば、近隣の外国から来ている人、そして日本人や他の外国人もいて、そのようないろいろな人たちが被災後の社会を作っている。そのような状況では誰が中心になって社会を作るのかを考えてもしかたがないというところがある。この状況で「よりよい」社会とは誰が決めるのかと問われれば、それに対する私の答えは、それぞれのアクターが自分で責任を持って背負うしかないという答えになる。

山本　地域研究者は研究対象地域のことを代弁しえないという指摘について。第一に、そのような自覚を持つことは重要だと思うが、だからといって逆に地元の人がその地域のことを代弁できるということでもないはず。では誰も何もいえないのか。そもそも地域研究者が対象地域について

語るのは当事者だからではない。現実には当事者であることがあっても、地域研究者として語るときは部外者として語っている。当事者をまるっきり排除して部外者だけでその地域のことを語ってもよいということではなく、当事者と一緒の場にいてなお部外者として語ることの意義を考えるべきだと思う。

【15】地域研究は対象社会を常に現状肯定するのか

――地域研究者は対象地域に対する世間一般の批判に乗っかって対象社会を批判するのではなく、対象社会に内在的な論理を見つけることでその社会のあり方をいったん肯定した上で論述するという話だが、そうすると結局は対象社会がどんな状況でも現状を肯定することにならないか。

西　一般的な傾向として地域研究者は研究対象地域に思い入れを抱きがちだということはいえると思うが、そのことは、地域研究者は研究対象がどんな状況にあってもそれを肯定するための論理を探し出してくることに腐心しているということにはならない。一見して誰の目にも明らかに善悪が判断できる事例ならわかりやすいが、問題はそうではなく見る人の立場によって見方が変わりうるグレーな状況。それに対しては、研究者としての良心を総動員して語るしかない。誰もが納得する意見はない。極端にいえば、最終的には世界全部を敵にまわしたとしても自分はこのように考えるという態度で臨むしかない。もちろんその前の段階でそのように自信を持って主張できるような情報収集や分析の努力をすべきで、限られた資源や知識を総動員して自分の考えを組み立てる必要がある。

【16】地域研究は対象社会の変化に対応できるのか

――今日の研究会では地域研究の災害への取り組みとして「被災前の状況を踏まえて被災後を理解する」といっていたが、災害以前の社会が被災後も残って機能していることが前提となっているように聞こえる。被災者としては、被災を契機に被災前の社会における資源配分のあり方を変える可能性があるのではないか。その可能性があるときに研究者としてどのように対応するのか。

西　地域社会の変化に対しては積極的に捉えている。研究会での発言は、日本社会やあるべき普遍社会に照らして現地社会で起こっていることを分析・評価すると当事者の認識とずれてしまうことを強調したかった。災害対応に即していえば、被災前の社会を踏まえてその延長で見るといったとき、たとえば「この村ではこの人が権威である」というように単純な延長上で見ているのではなく、その社会ではどのような種類の人が権威を持っていたのか、その状況を人々がどう受け止めていたのかといったことを見ている。被災以前の状況をもとに被災後の行動を予測するので

はなく、変化する部分と、変化するけれど根本では共通している仕組みを見ているということ。歴史的な経験のなかで出てくるかたちを見ていて、それが出来事ごとにどう変わるのかを見ている。作業の上では現場に行く際に「このあたりが変わっているのではないか」などと仮説を立てることもあるが、それは最初の取っ掛かりとしての仮説であって、その場合でも固定的に見ているわけではない。

Ⅵ 異分野とどこが違うか

【17】地域研究者は仮説群や概念を共有しないのか

――私は政治学が専門だが、実は政治学でも「ディシプリンがない」といっている。経済学や社会学や歴史学など他の学問分野から理論を借りていて、政治学独自の理論はどこにあるのかと議論している。だからといって政治学という括りが無意味なものだとは政治学者は誰も思っていない。政治学をしている人たちが共有している仮説があり、共通の概念がある。共通の方法論があるというよりもそこにまとまりの核があるのかと思う。地域研究では共有されている仮説群や概念はないのか。

小森　私の理解では、多くの地域研究者は仮説群や概念の共有を求めていない。地域研究はまず仮説や概念があってそれを研究するという方向で進んでいない。西さんのように災害現場での関わりや柳澤さんのように自然科学と人文社会科学の接合を考える上では仮説群や概念が事前にあるかもしれないけれど、一般的に地域研究者が出発点として何らかの概念を共有しようとすることはないと思う。ただし課題はあるので問題設定を共有することは可能。研究する上でのトレンドのようなものは何となくある。地域研究は特定の国や地域と関わるけれど、社会のなかでどの問題を扱うかを気にするという特徴があるため、国や地域を超えて現代社会との関わりで出てくる問題にも関心がないわけではない。

――特定の国や地域と関わるというが、地域研究における共通の概念や課題が国や地域に依存するのであれば、他の地域を研究している人との間で議論はできないということか。

小森　そうではない。特定の地域について見ていても、その問題の現れ方などを考えることを通じて常に世界のことを意識しているため、他の地域を研究する人と合同で研究することも当然できる。

山本　共通する仮説群や概念があるかないかということと、それがいま目に見える形で提示されているかどうかは分けて考えるべき。地域研究に「仮説がない」ということがあるが、それは問いに対してあらかじめ答えの方向を決

めてから研究するわけではないという意味。はじめそうだとしても、研究が進むうちにその問いに対する答えが積み重ねられていくので、地域を超えて地域研究者に共通する仮説群や概念は存在する。現状ではそれを言葉でまとめたものがあまりないので仮説群や概念が存在しないように感じられるということだろう。ただし、共通する仮説や概念があるといってもすべての地域研究者に共通する仮説や概念があるということではなく、関心などによっていくつかのまとまりに分けられて、そのなかで共有される仮説や概念ということになると思う。

西　地域研究者に共通の仮説や課題はあると思う。現状ではそれを記述する言葉を揃えようとする方向に向かっていないにしても、同じ課題について話しているし、わかりあえる。それがあまり積極的に記述されていないのは、地域研究者には個別の論文にそれを読み取る力があるはずだから。先行研究を自分の関心に沿って整理すると、自分が関心を持っている課題に対してそれぞれの研究者が論文を通じて議論を積み重ねている様子を見て取ることができる。その意味では先行研究のセットはひとつの課題に対する仮説群になっている。先行研究をどう組み替えてどのセットにするかはそれぞれの研究者が取り組む課題によって選ぶことになるため、このような課題のひとつひとつを言語化して並べておく制度化がなされていないので課題や仮説があることが目に見えにくい。存在はしているけれど、それをあえて整えようとしていないのが地域研究。逆にいうと、言葉を揃えていなくても共通の課題や概念をとりだすことができるということで、したがって目に見える形で提示されていなくても共通した課題や仮説はある。

【18】地域研究から国際関係論はどう見えるのか

――私は国際関係論が専門だが、国際関係論から見ると、地域研究者とのあいだで互いにコミュニケーションが取れているのかがわかりにくい。地域研究から見て国際関係論はどう見えるのか。

山本　学問分野に対しては、地域研究者としての自分のものの見方は学生時代に国際関係論の先生から学んだことに影響されている部分が大きいと思っているため、個人としては親近感がある。個別の国際関係論の研究発表や論文に対しては、とくに自分が関心を持っている地域に関するものについては、自分が考える「地域社会のリアリティ」とはかなりかけ離れているという印象を受けるものもないわけではない。ただし、だからその研究にリアリティがないというつもりはなく、おそらく自分の関心に沿ったリアリティと異なる位相でのリアリティがあるのだろうし、そのようなリアリティが意味を持つ場面もあるのだろうと想像する。国際関係論の研究には自分が受け止めて評価するの

が難しいという印象を受けるものがあることは確かだが、これは国際関係論に対してだけでなく、地域研究を含めて研究全般について感じることもある。

柳澤　自分はベトナムが専門だが、国際関係論がらみのベトナムに関する論文については、特定のトピックについて異なる地域のものを拾い出して単純に比較しているだけでしかないという印象を持っている。トピックの持つ意味は社会の文脈に照らして理解するべき。もし比較したいのなら、関係性どうしの比較、あるいはシステムどうしの比較をしてこそ国際関係論なのではないか。たとえば、どの村にも農民会があるかもしれないけれど、それぞれの村における農民会の意味は違うので、A村とB村の農民会をそのまま比べても意味がないかもしれず、A村の農民会とB村の青年会を比べた方がいいかもしれない。村の構造や機能を理解しないとちゃんと比較できない。このことに自覚的なのが地域研究。ただし、A村の農民会とB村の青年会を比較する研究は評価されにくい。

【19】地域研究者が他分野の概念を学ぶと話が通るのではないか

――学問の方法を身につけることは外国語を学ぶことに似ているように思う。たとえば国際関係論の研究者と話をするときに、国際関係論で共有されている概念を使って話されるので、それを知らないと話が通じない。他のディシプリンでどう位置づけられているかを知っておくことは重要ではないか。

山本　他の学問的ディシプリンについて一通り知っておくのが戦略として重要だというのは同意見。ただし、すべての学問について事前に基本概念を身につけておくことは無理。それに、本当に事前に全部身につけておかないと話はできないのか。たとえば政治学と経済学のように既存の学問的ディシプリンどうしが対話するときにはどうするのか。結局はその場その場で互いに通じる話し方を探り当てていくしかない。外国語の会話と同じというのはまさにそうで、相手がいっていることがわからなかったら「私はその言葉の意味がわからないので私にもわかる言葉で話してください」とお願いするしかないし、専門用語がわからないからといってその分野で考えていることがわからないとは限らない。異なる分野の人のあいだでうまく話ができないとしたら、理解できない受け手と説明できない話し手の両方の責任であり、それをどちらか一方のせいにするのは知的怠慢といわざるをえない。

【20】地域研究は大学教員としての就職に不利？

――ディシプリンを勉強していなければ就職が難しいという話を耳にする。それは、大学や大学院で地域研究を専門

にした人には大学に残る選択肢はない、言い換えれば、地域研究者はみんな大学の教員にならなければならないという話で終わるのか。それ以外の職に就いて地域研究の専門性を生かす道はないのか。

山本　地域研究とは、狭い意味では特定の地域についての知識や理解を深めることで、外国語が話せるようになるし特定の地域の専門家になれる。それを利用して官公庁や民間企業に勤めたり非政府組織（ＮＧＯ）などの市民団体に参加したりするなど、大学卒業後の進路はいろいろな可能性が開けていると思う。それはそれとして、大学で地域研究を学ぶことのもうひとつの側面を指摘しておきたい。地域研究を学ぶと結果として外国語を習得したり特定地域にくわしくなったりするが、地域研究で学んでいるのはそれだけではなく、自分が慣れ親しんでいるのとは異なる人々のあいだに身を置いたときにその場の人間関係を把握して自分をうまく位置づけるというスキルなどを含む。その意味では、研究職に就く人もそうでない人も、地域研究を学ぶとその後の長い人生できっと役に立つ。

小森　ディシプリンを学ばないと就職に不利だという言い方を聞くことがあるけれど、それはアメリカの大学事情をもとにした話。日本の大学では、とくに私立大学では、最近ではディシプリン別ではなくディシプリンをまたいで学部や研究科が作られることが多い。日本の状況は必ずしもディシプリン別の研究者が求められているわけではないということ。その意味では、むしろ学際的な地域研究の方がこれからの就職に有利だといえるかもしれない。問われているのは「統合力」のようなものかもしれないと思う。ただし、就職するまでにどこで業績をあげてどこで評価されるかを考えると、学術雑誌はディシプリン系のものしかなく、それにしたがって論文を書かないと評価されないのも事実。地域研究的な研究が評価されるような仕組みを地域研究コンソーシアムなどで少しずつ重ねていけば、社会のなかでの地域研究の認知度も上がるのではないか。

Ⅶ　異業種とどう協力するか

【２１】地域研究者は政策立案にどう関わるべきか

――地域研究者は外交をはじめとする国の政策にどう関わるべきか。国の政策に対して地域研究者は責任が取れない、だから地域研究者は国の対外政策に関わるべきでないのか、それとも、国は放っておくとある地域に対して最悪の戦略をとるかもしれないので、それを防ぐために地域研究者は政策立案に関わるべきなのか。

西　官僚には政策決定という専門性があるはずで、情報収集したうえでどんな判断をするのかはそれぞれの専門性に

応じてやればよいこと。研究者には研究者としての専門性があって、政策立案は研究者の専門性ではない。それぞれの専門性に応じて評価されていれば、後で望ましくない結果になったとしても「研究者が言ったから信じたのに大変なことになった」とは言わないはず。この質問は政策立案の話だが、話の構造としては災害対応や紛争解決を巡って人道支援の実務者とやり取りするところで起こっている問題と全く同じと感じる。緊急時だから地域研究者は情報提供してほしいといわれるが、その意味は何らかの決断にお墨付きがほしいということだったりする。言い換えれば、地域研究者に決定してほしいだけだったりする。

【22】地域研究はNGOとどう連携できるか

――NGOと地域研究は互いにバラバラでよいのか。NGOは学問のことをどう思っているのか。研究者が現場に行くことがあるとしても、実務にとってはしょせん研究者であり外部の人であると見ているのではないか。地域研究者はそれをどう自省的に克服していくのか。また、地域研究は評論家集団としてではなくNGOとの連携をどうはかるのか。

山本　研究者が現場でNGOなどの実務家と連携することは重要だと思っているけれど、そのためにどうすればうまくいくかは難しい。外国の災害の緊急支援の現場で人道支援団体と一緒に仕事したときに感じたことだが、第一に、大手の支援団体にとって一研究者の意見に従うのはリスクが大きく、大学や学会などの組織としての意見なら従うが、そうでなければ国連機関や外務省の情報をもとに行動した方が安全という考え方がある。第二に、人道支援団体には研究者に比較的好意的なところもあり、災害発生直後に現地で合同調査などを行うことを重ねることで地域研究者の視点を入れることは大切だという認識が育っているとの印象を受けるが、人道支援団体は地域研究者に責任を負わせようとするし、地域研究者は支援プログラムは支援団体が責任を負って進めるべきだと考えるため、地域研究者の知見を実際の支援プログラムにどう反映させるかという部分で話が止まっているような印象がある。もっとも、地域研究と人道支援の連携が止まりやすい肝心の部分はそれぞれの専門性に関する部分ではなく「企業文化」のようなもの、具体的にいえば締め切りを守って報告書を提出するかどうかということだったりするようだ。第三に、人道支援の現場のスタッフのあいだには自分たちの事業がより大きな観点からどのように位置づけられるのかを示してほしいという要望があり、他方で人道支援団体の本部では世界のすべての地域について地域事情に即した意味づけを与えることはできないという状況があることから、事業サイトを含む地域の歴史文化や政治経済などを踏まえた上で人道

支援事業を位置づける説明を与えるという点で地域研究者が求められている。

【23】社会に発信するならジャーナリズムの方が有効ではないか

――研究者は論文を書くが、それが使われるのはせいぜい政策で、一般の人の手に届きにくい。あるいは、次の研究をするための研究になっているようなところがある。現場に近いものにもとづいて政策を離れた実践を研究課題にすることをどのように考えればいいのか。社会に関わるのならジャーナリズムの方が学術論文を書くより直接的に社会に訴えられるようにも思う。

福武　事実を多くの人に知ってもらうことだけを目的にするなら一般読者が読む雑誌で書く方がいいかもしれない。これに対し、アカデミズムの意義はものごとの多面的な面をじっくり見ることで、その点ではジャーナリズムにできない部分がある。また、ジャーナリズムも結局はニュースで、注目されるニュースを追っていくという性格がある。ジャーナリズムでは取り上げられないけれど意味があるものを取り上げることも重要で、それはアカデミズムで引き受けられること。

西　即効性を考えるのなら週刊誌に書く方が意味があるかもしれない。ただし、即効性のある媒体は消えるのも早い。誰がどこに書くかということもメッセージとして伝わることを考えると、どこにどう書くべきかは課題によって違ってくる。研究者が新聞に原稿を書くこともあり、そう考えると、ジャーナリストと研究者ではどの段階で紙面がもらえるかという違いであって、新聞か大学かという違いではないのかもしれない。研究とは論文を書くことだが、大学でやっているのは論文を書くことそのものではなく、ものの見方を身につけること。大学院で学んだからといって常に研究の枠のなかで発信しなければならないわけではない。社会への働きかけ方はさまざまで、ものの見方を身につけるのが大学。別の言い方をすると、他人に共有される形で提示する方法を学ぶところが大学。

【24】実践の経験をどう論文にするか

――実践で身につけたことを論文にするときに問題が起こらないか。私は大学院に入る前に互助グループを作っていた。私がディレクターだとみんなわかっているので、インタビューしてもみんな本当のことを言ってくれているかわからない。また、調査で取ってきたデータを論文に書くとき、NGOのメンバーを研究に利用しているのではないかという葛藤がある。それを超えたところで研究と実践の枠組をどのように作ることができるのか。

福武　自分にも同じような経験がある。NGOの開発と紛

争下における人権侵害や人道援助を取り上げる運動があり、それに対して批判的な視点を取り入れて研究しているが、NGOを利用しているのではないかという批判は常に受けている。自分ではそれらの批判にもかかわらず意義があることだと考えていて、お世話になった人たちへの裏切りだとは思っていない。しんどいと思うことはあるけれど、自分とは異なるいろいろなディシプリンを持った人がいるなかで違和感を持ってそれを伝えてくれる人が身近にいるのはありがたいことだと思っていて、それと同じように違和感を伝えることに意味があると思っている。専門が同じ人に話すとわかってもらえてうれしいけれど、わかってもらえない人に説明することも意味があると思う。

【25】研究者ではない人が論文を書く意義は何か

――私は外務省勤務のかたわら研究論文を執筆したりもしているが、少額の原稿料を得るために自腹で資料収集するのはなぜかと同僚たちに不思議がられている。私は研究や論文執筆を個人として行っているので外交政策としては直結していないが、そのように研究を続けることに意義はあると思うか。

山本　ご質問者は、研究と別に外交という自分の専門性を持ち、それを利用して研究も行っているということだと思う。外交の専門家にできて一般の地域研究者にできないこととして、現地社会の有力者に会いやすいとか、そこで見聞きしたものを公電の形で発信することができるとかいうことがあるはず。研究活動がこのような専門性とどのようにつながるのか興味深い。もうひとつ考えられるのは、研究するだけでなく論文執筆という形をとっていることの意味。世の中には学術論文は難しいという声もあるようだが、研究者の発信内容はちゃんと読めば社会にとっても意義があることがたくさん含まれていると思う。学術論文という作法にのっとって書かれているため、一般の読者がそのまま読んでもわかりにくい部分があるということ。ご質問者は研究成果を論文の形でも発表しているということなので、論文の書き方の作法を身につけているということであり、したがって論文の読み方も身につけているということ。研究者が書く論文をどのように読めばいいのかを外務省でうまく広めていただけば、研究と外交がより密接に繋がるのではないかと思う。

【26】研究とアウトリーチをどう分けるか

――この研究会の議論では、基礎研究およびそれをもとにどのような学際研究が地域研究のもとで可能かという議論と、NGOとの連携など地域研究の応用研究あるいはアウトリーチに関する議論が混在しているのではないか。研究とアウトリーチを明確に分けたうえで地域研究の方法論を

議論するほうが生産的だと思った。

山本　研究の社会との関わりの部分をアウトリーチ活動と捉えるのは、それを研究自体と切り離しているためだろうと思う。私は研究を社会との関わり方のひとつとして捉えているため、社会から切り離して純粋に手法だけを取り出して行うことができる研究があるとは考えない。地域研究に限らずどの研究分野でもそうだろうが、とくに地域研究はそのことに対して自覚的であろうとする。地域研究では社会との関わりが常に意識され、地域研究の方法論を議論するときに常に社会との関わりが話題にのぼるのはそのため。

柳澤さんがこの研究会で毎回強調していることに「文系と理系」という二分法は意味を持たないというものがある。その二つを分けて互いの違いを明確にした上で融合や連携を考えるのではなく、実はもとになっている考え方やそれを実現するための方法には共通性が高いということを積極的に見るべきという意見だと私は捉えている。もっとも、はじめからすべてをつなげたものを見通して想像するのは難しいので、とりあえず「文系と理系」という分け方をして議論を始めなければならないのだろうと思う。「研究とアウトリーチ」という分け方についても、とりあえずそのような形で話し始めないとわからない人もいるという意味では有効な説明のしかたかもしれないが、最終的に向かうべき方向はそのような二分法に基づく連携ではないだろうし、地域研究の現場にいる人はそのことを了解しているだろうというのが私の前提。これはもしかしたら「研究」の境界をどう捉えるかという問題と関係しているかもしれない。

【27】地域研究者が開発プロジェクトに関わる意義は何か

――フィールドに行ってみると、開発プロジェクトなどにいろいろな形で関わっている研究者に多く出会う。私も将来機会があればそのように研究対象社会の開発に関わりたいと思っているけれど、それは研究ではないという声も耳に入ってくる。研究者が開発プロジェクトに参加すれば開発プロジェクトには助けになると思うが、そのことが研究を進める上でも意義があるという考えが共有されると参加しやすくなるように思う。そういう考え方は広まっていかないのか。

柳澤　文化人類学や農学研究で村に入った人はたくさんいるが、その多くが一九八〇年代から九〇年代にかけていろいろな形の開発プロジェクトに巻き込まれている。このことは特定の地域だけでなくいろいろな地域で起こっている。それぞれの研究者は「たまたまプロジェクトに巻き込まれた」と考えているようだが、研究者がフィールドでプ

ロジェクトに巻き込まれるというのは実際は世界規模での経験となっているのではないかと思う。研究者が関わることで起こる変化も似ている。研究者が村に関わると村人たちがその研究者のネットワークを利用してプロジェクトと少し違うことをしていくとか、研究者がプロジェクトに関わることを通じて従来持っていた村に対する理解を検証できたり、村人が研究者を利用する側面が見えてきたりする。このことは割と広く見られることで、これからいろいろな形で研究に表れてくるだろう。この方向を考えていくと研究の次の発展につながるかもしれない。

Ⅷ 地域研究の広がり

【28】研究対象への思い入れをどう表現するのか

――対象地域や対象社会に対する思い入れを論文でどう表現するのか。地域への愛情を研究成果に投影させてもいいのか、それとも距離を置くべきなのか。

山本　研究論文に研究者自身の人生観や思い入れが反映されるのは避けられないことだと考える。このことを認めた上で、思い入れや愛着を研究成果のなかでどう表現するのかという問いには、不特定多数の読者に対する説得力を高める形を工夫した上で、その範囲内で思い入れや愛着をおおいに盛り込むべきだと考える。そのような説得力を高める工夫として、研究者業界で共有している「物語」を掴んでそれに対応した形で表現することがある。自分が研究しているマレーシアでの例でいえば、国内の社会的な亀裂が大きいこともあり、国内にさまざまなコミュニティがある。そのため、特定のコミュニティにとくに愛着があるとしても、そのコミュニティの利害をストレートに代弁するような研究を発表すれば他のコミュニティから受け入れられなくなる。研究対象のコミュニティから歓迎されるだけでなく、他のコミュニティにも受け入れ可能となるように説得力を高め、その範囲内で思い入れや愛着を表現するように心がけている。

【29】「自信のない地域研究者」をどう考えるか

――この研究会では「自信のない地域研究者」という言い方が出てきたが、地域研究者は自分たちの研究内容に自信を持っていないということか。

山本　小森報告では地域研究が他分野の研究に対して従属的な扱いを受けるように感じることが指摘されていたが、地域研究が他人の土俵で従属的な位置づけを受けていたとしても、それ自体が悪いことだと私は思わない。どうして地域研究者は自分の研究に自信が持てないのかと考えると、研究内容や成果を相互に認めあうサークルが制度化さ

れていないからであって、個別の地域研究者の研究内容のためではないのではないかと思う。それよりも、地域研究を行っている学生のあいだで自分のやっていることに自信が持てなくなることの方がずっと問題。それをどう解消するかは、方法論や研究環境などのいくつかの方面から検討する必要があると思う。

これとは別に、地域研究者は自分の研究成果が他人に理解されないのではないかなどといった「自信のなさ」をいつも抱えているように思う。ここでいう「自信がない」の意味は、自分が持っているものの価値自体に自信が持てないということではなく、自分の持っているものに価値があると認めた上で、それが他人にも無条件で価値があると受け取られるはずだとは考えないという態度のこと。「自信がない」というと消極的に聞こえるが、「謙虚」といい換えてもいい。それと別に、自分の研究成果そのものに自信が持てないという場合もある。そのような人が無理に自信をつけようとするときに取り得る行動として、研究を狭く区切って、その外側や境界線上にある他の研究に対して攻撃的な態度をとることがあるように思う。その結果、「NGOの研究は社会活動であって研究ではない」とか「映像資料を使うのは遊びであって研究ではない」といった言い方が出てくる。これは自分の研究に対する自信のなさが裏返しになって他者を攻撃している例だと考えられ、この点では「自信がない」ことが問題になることもあると思っている。

【30】地域研究者は対象社会に介入するのか

――過去に戦争で利用された歴史があったために地域研究はネガティブな面だけ捉えられがちだけれど、そのことだけ考えるのではなく、仮に政治利用されるにしても平和的にポジティブに利用されることはできないのかを考えられないのか。もしポジティブに見るとしたら地域研究者は社会にどのように関わることができるのか。

西　政治目的ということをどう捉えるか。私が地域研究者的だと考えるのは、身も蓋もない言い方をすれば、結局は魅力的な「物語」を作ることに尽きると思っている。私は長年紛争が続いたインドネシアのアチェを調査対象にしている。アチェでの長期滞在中、紛争が激化していろいろな立場の人が入り乱れて混沌としたなかで事態をどう考えればいいかが問われる状況に身を置いていた。そのような状況で、この地域はこうあるべきという理想像やモデルをあらかじめ設定して、それに向かってみんなの理解を求めて人々を動員するという関わり方をすると、規範をどう捉えるかとかどこからその規範がもたらされたのかとかいう問題が出てくる。そのアプローチもあり得るとは思うけれど、地域研究者がそのアプローチを取る必要はない。いろ

いろな人の話を聞いてまわりながら、それぞれの人が「これならいいかな」「こういう社会なら魅力的だ」と思う共通の考え方を見つけていくというアプローチもあって、そこでは地域研究が大きな力を発揮すると思っている。そのような理解の枠組を地域研究者が作り出すことができれば、そこから先はそれぞれの専門性を持った人がそれぞれの現場に応じて具体的な作業に取り組むことができて、それによって状況がよくなっていくと期待できる。地域研究者としてはこのように貢献できればいいと思っている。理想像やモデルを作って人々を動員する方法が悪いと言うつもりはないけれど、地域研究者には違うやり方ができるはず。

◉注

＊1　この質疑応答のもととなる研究会は以下のように行われました。

［第一回研究会］（二〇〇八年一一月一四日、東京大学）
司会　西芳実
話題一　山本博之「先行研究をどう読むか——東南アジアのナショナリズム論を例として」
話題二　柳澤雅之「地域社会の制度や文化に埋め込まれた自然環境条件を探る」
話題三　田原史起「『半径五〇メートル』の地域研究——コミュニティ・スタディの可能性」

［第二回研究会］（二〇〇九年二月一〇日、早稲田大学）
司会　小森宏美
話題一　山本博之「地域研究では『思い入れ』をどう表現するか」
話題二　柳澤雅之「地域研究は科学か？」
話題三　久保慶一「『フィールドワーク』を分解する——バルカン政治比較研究の視点と経験から」

［第三回研究会］（二〇〇九年六月二六日、上智大学）
司会　西芳実
話題一　山本博之「研究を通じた現実社会との関わり」
話題二　柳澤雅之「地域研究の客観性を考える」
話題三　福武慎太郎「研究と実践の関係を問い直す——上智アジア学の歴史から」

［第四回研究会］（二〇〇九年七月二日、東京大学）
司会　山本博之
話題一　小森宏美「地域研究の立位置の再検討——他ディシプリンとの競合・協力を超えられるか」
話題二　福武慎太郎「研究と実践の関係を問い直す——市民運動、アジア学、NGO」
話題三　西芳実「フィールドはどこにあるか——地域研究者と社会の関わり」

［第五回研究会］（二〇〇九年一二月一九日、大阪大学）
司会　鈴木広和

話題一　山本博之「先行研究との対話――東南アジアのナショナリズム論を例として」
話題二　柳澤雅之「地域理解のための自然科学者によるアプローチ」
話題三　河森正人「創られるコミュニティ――地域研究と開発研究の対話」

［シンポジウム］「実践系学知としての地域研究」（二〇一〇年一一月五日、上智大学）

司会　福武慎太郎
趣旨説明　山本博之
報告一　柳澤雅之「地域社会にとっての文理融合」
報告二　小森宏美「事例研究を越えて――ヨーロッパ地域研究の今日的課題」
報告三　西芳実「災害対応の地域研究――研究者にとっての人道支援とは何か」
コメント　井上真／酒井啓子